目次

序……1
はじめに……1
本書の構成……5

第一部　幕末維新期における「国際社会」認識の転回……9
序章……11
第一章　「西洋」と「日本」の発見……23
Ⅰ　「他者」としての「西洋」の発見……23
ⅰ　家学への盲信——長州藩山鹿流兵学師範の時代……23
ⅱ　ウェスタン・インパクトとの邂逅……28
ⅲ　『新論』との邂逅……33
Ⅱ　「自己」としての「日本」の発見……36
ⅰ　守るべきもの——自己意識——の模索……36
ⅱ　後期水戸学との邂逅……41

Ⅲ　現前する「他者」――ペリー・プチャーチン艦隊の「彼方」にあるもの……44
おわりに……49
第二章　「外夷の法」――松陰と白旗……58
はじめに……58
Ⅰ　松陰と白旗書簡……60
Ⅱ　なぜ松陰は白旗書簡を「遂に信ずる能はず」と結論したのか……65
Ⅲ　初期松陰における白旗認識……68
おわりに――太平天国の乱と松陰……72
第三章　読み替えられる「華夷秩序」――「国際社会」への編入と参加……84
はじめに……84
Ⅰ　幕末における「天下」観念の変容……85
Ⅱ　『外蕃通略』に見る「敵国・敵体」概念……90
ⅰ　敵国…日本と対等な独立国（「帝国」・「自立の王国」）……93
ⅱ　属国…従属国および植民地（「冊封の王国」）……96
Ⅲ　将軍の元首化……98
おわりに――「国際社会」への強制編入に対する抵抗と新しい国家像の提示……103
第四章　松陰とアジア――「雄略」論の展開……111
はじめに……111

Ⅰ「他者」としてのアジア――幕末日本の「アジア」……111
Ⅱ 侵略主義と松陰……114
Ⅲ 松陰の「雄略」論……116
Ⅳ 松陰と朝鮮……123
おわりに――「懾服雄略」から「航海雄略」へ……129

第二部 吉田松陰における思想形成とその構造……139
序章……141
第一章 吉田松陰における思想上の「転回」――水戸学から国学へ……145
はじめに……145
Ⅰ『新論』を求めて……147
Ⅱ 松陰における「コペルニクス的転回」……154
Ⅲ『野山獄読書記』における検討……158
Ⅳ 松陰の著述上における「転回」……166
Ⅴ「皇国の皇国たる所以」をめぐって……170
おわりに……173
第二章 論争の書としての『講孟余話』――吉田松陰と山県太華、論争の一年有半……182

はじめに……182
Ⅰ『余話』の成立過程について……186
Ⅱ 松陰―太華論争の過程……188
Ⅰ期「孟子序説」～「滕文公」（一八五五〈安政二〉年六月一三日～一一月一一日以前）……189
Ⅱ期「離婁」～「告子」（一八五五〈安政二〉年八月二九日～一八五六〈安政三〉年五月一四日以前）……193
ⅡA「離婁上」～「離婁下三」（一八五五〈安政二〉年八月二九日～九月七日）……193
ⅡB「離婁下四」～「万章」（一八五五〈安政二〉年一一月一一日～一二月二四日）……194
ⅡC「告子」（一八五六〈安政三〉年三月二一日～四月一五日）……198
Ⅲ期「尽心」～「自跋」（一八五六〈安政三〉年五月一四日～八月上旬）……200
Ⅳ期「反評」（一八五六〈安政三〉年八月上旬～一二月二五日）……205
おわりに……207
第三章 吉田松陰の神勅観――「教」から「理」へ、そして「信」へ……210
はじめに……210
Ⅰ 松陰と宗教……213
Ⅱ「教」としての宗教――愚民観との関係……216
Ⅲ「理」としての宗教――「異端怪誕」の否定……219
Ⅳ「信」としての宗教――「不合理」なるがゆえ……224

おわりに……228
第四章　幕末における普遍と固有……233
はじめに……233
Ⅰ　普遍・特殊・固有……235
Ⅱ　「天地間一理」をめぐって……237
Ⅲ　「天下公共の道」と「国体」……242
おわりに……244
結論……251
あとがき……257
参考文献……261
索引……1